

掲載者の

声

「いきいきサポーター」
十周年おめでとう

藍 早瀬

介護予防が重要視されて十年。しかし、長野県は昭和二十年佐久病院の若月先生が地域での予防医学を提唱して七十年がたちました。予防医学の基盤は地域住民の生活から生まれるとすると、長野県にはその素地が十分にあったわけです。十年前、転倒骨折などによる寝たきり高齢者を作らない、ひとり暮らしの高齢者や、昼間閉じこもりがちな高齢者が少しでも生き生きと楽しめる場所づくりを考えたとき、住民の力の助けが必要でした。

まずは自分たちが元気になる体力がつくプログラムをということでオリジナル「筋力つくつく体操」(座って十分立って十分)をつくりしつかりと覚えていただきました。

「いきいきサポーター」が活動しやすく受け皿となる場所「おたつしや教室」も同時進行で作ったことは後の活動に大きな意味が生まれたのです。

人のお役にたちたい、ボランティアをしてみたいと思いついて、実際に研修・講習を受けてもなかなかそれを生かせる場所が無いのが実情です。私も今までたくさんさんのボランティアの育成研修、講習会に携わってきましたが学んだことを生かせる場所が無くそのままになつてしまっている人のなんと多いことか。

手探り状態で始めた「いきいきサポーター」の育成と、今では十五ヶ所に広まった「おたつしや教室」はこれからの高齢社会に無くてはならないモノになっていくことでしょう。

「人良かれ 我良かれ 我は

人よりちょっと良かれ」

「いきいきサポーター」はまず自分の為に運動習慣を身につけます。さらにご近所の高齢者に喜んでいただく為の企画、イベント、運動指導などを行ううちに自然と脳も体も活性化し生活の質を向上させることが出来るのです。人の為に、近所の高齢者の為に始めた「いきいきサポーター」の活動がすべて良い形で自分に返ってくるので、継続出来たともいえるのではないのでしょうか。

そして何よりも、この十年間見守り続けてくれた行政の方々、伊那市在住の健康運動指導士の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。

「日々何かをすることがある」今日は人の為に何が出来るだろうか「仲間と楽しくかわっていききたい」こうした思いはすべて「生きがい」につながってくるのです。

昨年は、代々木体育館元氣げんきフェスティバルでのゲスト出演、沖縄読谷村のボランティアとの交流を果たしま

した。これからも「生きがい」に通じる仕掛けをしていきたいと思っています。今後とも「いきいきサポーター」の皆さんへのご支援をよろしく願います。

(社会福祉士・健康運動指導士)

簡単!気軽に!!
肩こり解消法

有賀 暁子

私たちは日常生活、常にかがみで生活することが多い。すると、いつの間にか背中が丸くなり、首が前に出て、姿勢が崩れ、肩こりや腰痛の原因になります。

そこで、今回は手軽に姿勢を正し、体をスッキリさせるストレッチを紹介させていただきます。

1 手を後ろで繋ぐ

肘をしっかりと伸ばし、左右の肩甲骨を背骨に近づけるように。

胸を張って、軽く斜め上を見る。

深呼吸を続けながら、心地さを感じるまで行う。

2 肩を回す

手先を肩に置き、そこを支点に、肘で円を描くように、肩を大きく回す。

特に、後ろに回した時に肘をしっかりと後ろに引きながら回す。

3 背伸び

胸の前で両手を組み、手のひらを空に返ししながら、肘をしっかり伸ばし、大きく伸びをする。

最大限に伸びたまま、体を左右に曲げ、体側を伸ばす。

4 脱力

最後にもう一度伸びをし、組んでいた手を離し一気に脱力する。

腕の力、肩の力、背中を力

リセット完了。

毎日の継続、心掛けで、正

しい姿勢は保つことができません。

お腹をキュッと引き、真っ直ぐ前を見て、体に負担のない姿勢を目指しましょう！皆様がより一層健やかな毎日を送れますように！！

(体操インストラクター)



ふるさとの仲間

井口 昭久

名古屋で久しぶりに大雪が降った。私は国道302号を走っていた。渋滞で全く前進できなくなると、故郷の雪の日を思い出した。

ぼんやりと思いだされては消えてゆく記憶である。雪が降ると「まさちや」た

ちが呼びにきた。私は「あきちや」と呼ばれていた。五人で山の麓でそりに乗った。

降りしきる雪の中をそりに乗って滑り落ちると宇宙の流れ星になったような気分になった。

五人の仲間はいつも一緒だった。

大人に秘密に組織されていたので、客観的な記録が存在しないが、仲間には掟のようなものがあつた。

口笛で呼び出されたらどのようなことがあつても出て行かなければならなかった。

大将はいつも「まさちや」だった。いつでも随意におならをすることができた。

天竜川に架かる橋があつた。30メートルほどの橋を渡る間に何回「屁をこけるか」競争をさせられた。「まさちや」はその間に5回もできたのだ。私たちはたまげた。

私は胃腸の弱い子供であつた。下痢気味であつた。しかし例外は認められなかった。私は「屁」のせいで馬鹿にされて仲間はずれになった。

仲間に入れてもらえない悲しさは親に「クラに入れられる」程度に悲しかった。

私たちはそうやって権力の恐ろしさを体験したのである。

いじめられてもいじめられて「まさちや」を嫌になることはなかった。

おならは「悪」だということを知ったのは女の子に関心を持つようになってからだ。

「勉強ができてはいけない」という確かな価値観もあつた。

私たちは勉強のできる子の勉強部屋に向かつて遠方から石を投げた。自分たちの立場を守るための集団的自衛権の行使であつた。「俺は勉強ができた」と言つて身を守つた。勉強ができるといういじめられたのだ。

中学へ行くと勉強ができることが「善」に変わった。これほどに価値の転換が行われたことは人生の中でこの例を置いて他にない。

302号線の雪は太陽が昇るとたちまち溶けた。

私のおぼろな「ふるさとの仲間」の記憶もすき焼きの鍋

に入れた砂糖のように消えていった。

(名古屋大学名誉教授・愛知淑徳大学教授)



挿絵 茶畑

ときめいて元気に

池上 晴夫

長らくご無沙汰しました。

私は狭心症、睡眠無呼吸症、腎結石、前立腺癌はじめ6種類の病気を抱えておりますので意に任せぬことが多く、ふるさと大使として何の貢献もできず、心に掛かつております。

しかしいまのところ寝たきりにもならず、歳にしては活動的な日常です。そこで、老いて身の内に病や傷害があつても、それに負けず元気に過ごす私なりの方法をご紹介します。

第1は栄養です。これは広く知られたことですが、一言でいえば「バランスのとれた食事を腹八分目に」ということ、特に「よく噛んでたべる」ことを心がけています。

第2は「身体をよく動かすこと」。若い人にはスポーツがよいのですが、老いてからは「歩く」ことが一般的でしょう。大事な点はいわゆる散歩ではなく「歩幅を大きく、少し速めに」を心がけること、

私は77センチの歩幅で毎分110歩、毎朝三十分(距離にして2・5キロ)歩きます。それにその他の運動も。

第3は毎日何かすること。何もしないでいると身も心も萎え、結局健康を損ないます。何をするかというところ自分の「好きな事」が一番いいでしょう。趣味はその好例です。

好きな事はやって楽しく、疲れないし、長続きしますし、上達の楽しみもあります。力仕事は無理ですが、俳句、短歌、絵画、書、手芸、写真など老いても続けられることは身近にいくらもあります。その中から「好きな事」を選んで、それを継続することです。

第4は心を「ときめかす」

こと。1で身体の基本とエネルギー源を作り、2で体力や身体機能を維持し、3で頭を使います。あとは心の問題。心はときめかすことによって若返ります。心が若返ればからだも若返ります。心とからだ若返れば病気に強くなりまします。たとえ病気になるっても病気を受け入れ耐える強さが得られます。ではいかにして心をとときめかすか？これは人それぞれであり一概には言えませんが、例えば3に挙げた趣味に生きれば、その上達を自覚することによって心のとときめくこと間違いありません。家族との団欒もよし、独りの人は異性との付き合いが強力なときめきの特效薬となりま

しょう。要は自分を喜ばすことです。

以上私が日頃心掛けている4つのことを挙げました。これは長寿の秘訣ではありません。寝たきりにならないための方策です。私はこれを毎日の実践の目標として、残る人生を元気に生きたいと願っています。

(筑波大学名誉教授)



故郷の東駒ヶ岳(甲斐駒ヶ岳)に登山して

伊藤 喜良

昨年の木曽御嶽山の噴火により事故にあわれた方々についで心が痛みます。ご冥福をお祈りいたします。私も山が好きで会津の山々にはよく登ります。昨年お盆には東駒(甲斐駒)に二男とともに登山し、

登頂しました。実は一昨年の夏にも同山に挑戦したのですが、摩利支天への分かれ道あたり、頂上まであと三十分ほどのところで、帰りのバスの時間の関係で登頂を断念した経緯があります。またその前年には仙丈に登りましたが東駒のほうきがきつかったです。七十歳になったのを記念して

の登山で疲れましたが、まだまだ元気に生きられそうな気分になりました。今年はどの山に挑戦しようかと検討中です。長谷(かつては長谷村、それ以前は美和村といった)の美和中学時代の登山行事で、仙丈への登山は戸台から赤河原をさかのぼり、端溪山荘を経て北沢峠に至ったものですが、林道の開通でかつてのルートが寂れているとのこと、少しさびしい気持ちを持っています。

下山してきたのち登山バス発着地点で、たびたび利用している仙流荘に宿泊しましたが、驚いたことが一つありました。登山の疲れをとるために仙流荘自慢の風呂に入った

ところ首から太ももまで「おどろおどろしい」異様な入れ墨をした人物が入浴していたことです。風呂は混んでいましたが、誰もその人の傍には寄らず、彼は一人悠然と一つの洗い場を独占していました。私は傍らに行き、体を洗いな

がら見たのですが、高倉健さんや菅原文太さん主演のヤクザ映画や、テレビで放映された時代劇のヒーローである遠山金さんの肌に見られるようなきれいな桜吹雪の入れ墨ではなく、ほんとうに「おどろおどろしい」ものでした。

ところで私の学生時代、映画のヒーローであった高倉健さんや菅原文太さんが亡くなられたことは残念です。ことに菅原文太さんが晩年に土・農業に根ざした生活を、その思想に沿って様々な活動をされていたことに深く共感を覚えるものです。

昨年秋にはもう一つ楽しいことがありました。伊那北高校時代の同窓会が駒ヶ根市であり、懐かしい面々にお会いできたことです。死去された

方々も何人かおりましたが、皆さん一様に第二の人生を楽しんでおられるようでした。何十年ぶりかでお会いし、かつてのことを思い出し話がはずみましたが、これからも機会がありましたらしばしば帰郷したいと思っております。

(福島大学名誉教授)



ふるさとの言葉は「みやましき」かな

伊藤 延司

たまたま伊那に帰っている時、不祝儀があり、香奠袋が必要になった。

家を継いだ弟に「うちに置いてないかえ」と訊いたら、「みやましいやつかえ?」と聞き返された。みやましい。久しぶりに聞く言葉だったが、水引がか

かった香奠袋の立派な様が、鮮やかに目に浮かんだ。

グーグルで検索した「伊那の方言」には、「みやましい」は「きちんとしている」とある。しかし、「きちんとした」香奠袋では、何か言い足りなくて、余りが残った感じになる。

「ごしたいは、やっぱり、ごしたいでないかねえ」

同郷の妻が、最近よく言うようになった。方言辞典は「ごしたい」を「疲れた」と説明するが、これではピンとこない。このピンとこない辺りが、方言を標準語で割った時の、無限の余りかもしれない。「ごしたい」は「疲れた」では、どうしても、ごしたいのだ。

小学校の同年会で、久しぶりにあった旧友が、ボツンと「あの頃あ、みんながヒズこいてたのえ」と言った。ヒズこいた。そうそう、そんな言い方があった。方言辞典には「苦労する」「てこずる」などと出ているが、貧しさと寒さをこらえ、鼻水垂らしながら、黙々と学校に通った頃のこととは、「苦労した」では言い表せない。標準語

きだと言うのだった。

この言葉を聞いてから、この先生が尊敬できなくなった。方言の持つ微妙な語感やニュアンスが分からない人に、美は創造できないと思ったからだ。

高倉健さんと菅原文太さんが亡くなって、あの人たちがセリフに残した方言が、いろいろと見直されている。いわゆる、方言の力というやつだ。

標準語では、心に浮かぶ想念や感覚を、丸々そっくり掬い出すことができない。必ず、何か

弟の口癖は「ばかってえ」だった。バカを言うな、というような意味だが、弟がこの一言をいうと、いろいろ理屈をこね合っていた周りが一瞬、黙ってしまった。

悔しいけれど、弟は二年前に亡くなり、この二月に三回忌を迎えた。弟を思い出す時、必ず、あの「ばかってえ」が聞こえてくる。

(翻訳家・AFP通信日本語サイト 顧問)

御嶽山と「ぎざ虫会」

井口 武雄

戦後最多の被害者が出てしまった御嶽山の噴火にはびっくりしました。四年前に、小学校六年生の時に登ったことを思い出しながら、御嶽神社の境内でおにぎりを食べたこともあり、他人事とはとても思えませんでした。

その後、暫くの間、何人かの方から「故郷は噴火で大変でしょう」と言われました。

「全く問題はありません。御嶽山と伊那の間には三千m級の山が連なる中央アルプスがあるので、火山灰も飛んできません」と答えて御礼を申し上げました。高遠に住む従兄弟によると、実は少し飛んできたとのことですが。

南アルプスと中央アルプスが聳え立ち、真中を天竜川が流れる伊那の地に育ち住んでいる人にとっては、それらが美しい景色と生活の安全をつくり出してくれていることが

当たり前のことなのではないでしょうか。

しかし、他の地の人々はよほどの伊那通でない限り、御嶽山も木曾も伊那も同じ地のように見てしまえます。そしてそれは当然です。

太陽は朝、南アルプスから顔を出し、夕に中央アルプスに顔を隠します。夏冬問わず、太陽が伊那の地を離れることはありません。

燦々と注ぐ陽と滾々と涌く水・天竜川の水が、豊かな緑をつくり、稲・野菜・果物・花々を育ててくれます。

この自然が人々の心を和ませ、やさしい気質を生み出しているのだと思います。

「伊那の人間はぎざ虫を食べる。」伊那の良さをまず伊那以外の長野県の人に知ってもらおうと、「ぎざ虫会」を立ち上げた時に集まってくださった何人かの方々の第一声でした。「ぎざ虫は清らかな水にしか棲めません。真冬の寒さの中、冷たい水に入り、川石の下にいるぎざ虫を獲る逞しい人がいなければ、食べられません」

と反論し、お店に頼んでおい
たざざ虫を食べて見せました。
第一回目の「ざざ虫会」で、
すっかり食べたのは残念なが
ら私一人でした。数年この会
は続きましたが、メンバーの
大部分が仕事の一線を引きま
したので、ざざ虫をたつぷり
出してもらい、解散の集いを
先日行ないました。

「伊那の美しさ良さを、伊那
に住む人だけがひとり占めす
るのは勿体無い」が私の真情
です。

猫(たま)を駅長にしたら、
外国人を含め、観光客が引け
も切らず訪れるようになった
とまではやされている市が和
歌山県にあります。

私も含めて奇をてらうこと
があまり好きでない伊那の人
々が、このようなことをする
のは難しいと思います。

「ざざ虫会」に続くような何
かを編み出し、それを地道に
続けるのが伊那の外にいる伊
那人の役目と思い、今、模索
しております。

(三井住友海上火災保険株式会社
シニアアドバイザー)

ふる里は遠くにあり て思うもの

大羽 繁

私は、昭和二十年四月旧制
伊那中学に入学してから昭和
二十六年三月新制伊那北高校
を卒業するまでの六年間、旧
伊那町で下宿したり自炊をし
たりして学生生活を送りまし
た。伊那町は私にとって第二
のふる里です。

上京してから六十四年、年
齢を重ねるごとに、故里の山
や川が恋しくなります。啄木
の「ふる里は遠くにありて思
うもの」そして恋しく思うも
の」の心境が理解出来るよう
になりました。東京では長谷
出身者の親睦組織、東京長谷
人会の活動のお手伝いをして
交流を深めてきました。この

会は旧美和村と伊那里村が合
併して長谷村となった昭和三
十四年以來五十四年にわたり毎
年「ふる里の集い」を開催し
交流を深めてきました。この
会の素晴らしいことは、入野
谷長谷の気質というか心意気

「おしんのように辛抱強い気
質、もったいないという考え、
そして何よりも思いやりの
心」を持った人々の集まりで
あることで、会の活動を通し
て多くの先輩や後輩との出会
いに恵まれ、有意義な時間を
持たせてもらいました。

会の活動を通して大きな成
果の一つは、平成六年から、
ふる里長谷に当時「村の木」
であった楓の苗木代を会員の
有志で送ることを始めてから
二十年が経ち、長谷の各地に
植えられた楓や桜の木は成長
し見映えがするようになり、
とりわけ美和ダム周辺のもみ
じは秋には見事に紅葉し多く
の人々に楽しんでもらってい
ます。

そして私共の活動が評価さ
れて高遠町と長谷村が伊那市
に合併した折、「楓」が「市の
木」として採用決定されたこ
とで、大変嬉しく名譽なこと
と思っています。

昨年伊那市ふるさと大使を
委嘱された小生は、これから
も両アルプスに囲まれた伊那
市の素晴らしい景観を守るた

め、ふるさと納税、観光案内
等の活動で伊那市発展のため
貢献したいと思っているところ
です。

(東京長谷人会相談役)



高遠町長北原三平さ んの思い出

岡部 高明

私は昭和五十九年に大阪の
読売テレビからテレビ信州に
出向しました。勤務地はその
まま大阪で平成十年まで勤め
ました。期間中はよく高遠に
行きました。

高遠で北原三平町長のお世
話になりました。久しぶりに
お会いした日に町長は五郎山
の仁科五郎信盛の墓に案内し

てくれました。翌日は美簫の
井上井月の墓で、井月が高遠
で作った句のメモを見せてく
れました。

「旅人の吾も数なり花ざか
り」降るとまで人には見せて
花曇り」

その後、テレビ信州は高遠
町がスポンサーの「ルネッサ
ンス信州高遠」という番組を
作りました。年一回の一時
間番組を十年続けました。

北原町長は高遠町の「ルネ
ッサンス」に取り組んでおら
れ、番組の名前は町長の案で
した。平成四年の一回目はこ
の年開館した高遠町美術館を
中心にしました。平山郁夫氏
と町長が出演しました。サブ
タイトルの「山裾の町、新し
い町」には、新しい町作りを
はじめた町長の思いがこもっ
ていました。

このシリーズは高遠町出身
の政治家・文人を取り上げま
した。伊沢修二、中村不折な
どです。七回目の「中村弥六」
は、フィリピンのスぺインか
ら独立百年の記念日に合わせ
ました。中村弥六が独立運動

に貢献したことで、ラモス大統領から町長に招待状が届きました。マニラでの表彰式には富山裕一秘書といっしょに私も同行できました。

大阪の造幣局の「サクラの通り抜け」は四月下旬の一週間だけ一般に公開されます。各種二百二十本のサクラのトンネルに九十万人の人が出て賑わいます。ここに平成四年に高遠城跡公園のコヒガンザクラを植えました。町長とクワをつかったことが忘れられません。

いまサクラの木は大きくなりましたが、残念なのは「通り抜け」のころは高遠のサクラは葉桜になっています。

(読売テレビ放送株式会社社友)



御嶽山の噴火に思う

蟹澤 聰史

昨年九月二十七日の御嶽山噴火はまさに青天の霹靂であった。犠牲になった方々は五十七名にも上り、行方の分からない方も六名おられる(信濃毎日二〇一四年十一月二十六日)という惨事となった。もともと御嶽山は「死火山」といわれていたが、長い沈黙の後、一九七九年に山頂部の割れ目から水蒸気爆発が起こって人々を驚かせた。この噴火以来「死火山」という言葉は用いられなくなった。そして今回の噴火である。「木曽節」にも唱われ、登りやすい山として親しまれており、秋の紅葉シーズンに昼時と重なり大惨事となった。

伊那市の天竜川流域には河岸段丘の上に御嶽山の火山灰が厚く積もっている。この度の噴火でも細かい噴出物が伊那市まで飛来した。御嶽山は西駒の陰に隠れて伊那市からは遠い存在だったが、最近では権兵衛峠の下にトンネルがで

きて近くなった。

三峰川や天竜川による河岸段丘にかけては、御嶽火山のテフラ(火口から放出され、空中を飛行して地表に堆積した火山碎屑物の総称、平たくいえば火山灰や軽石)が積もっている。一番下にPar1という白色と黄色の火山灰があり、その上に何枚かの褐色のテフラ層が覆って数メートルにも達しており、総称して赤土と呼んでいる。

戦時中、この赤土層に横穴を掘って食物の貯蔵庫にした。万一の場合には、防空壕にもなるというわけだ。赤土層の一部は風化して真っ白くてカオリンを主とする柔らかい粘土層となり、それをこねて粘土細工を作ったりした。

Par1はおよそ十万年前の御嶽山噴火によるもので、はるばる木曽山脈を越えて厚く堆積したのだ。このテフラは東北地方南部まで飛来していることが分かっている。このような日本全土に降灰をもたらした火山活動は数多くあり、今の私たちには想像もつかな

い大規模なものである。こういった大規模噴火はたびたびあったが、現代人はそれを経験したことがない。また、いつ起こるかも分からない。自然の力は思いのほか大きなものだと感じさせられる。

今回の噴火で犠牲となられた方々に哀悼の意を表して筆を擱く。

(東北大学名誉教授)



私の『まやくせ』

上岡実弥子

私の夫は、横浜出身です。横浜には、目立った方言が無いそうです。一説では「〇〇じゃん」や「〇〇だべ?」が横浜の方言らしいのですが、夫はあまり使わなかったとか。よって、実家に帰ると、夫は、われわれの会話を物珍しそうに聞いています。

「『こしたい!』」夫「?」
「『こしたい』は、『疲れた』っていう意味(笑)」
先般、実家でこの『こしたい』が話題に出ました。
「『こしたい』は、確かに『疲れた』という意味だけど、『疲れた』より、もっと『疲れた』感じしない?」
「するする。『ベリー 疲れた』って感じ」
伊那の言葉(信州の言葉)は、標準語では表せない微妙なニュアンスが含まれているようです。

たとえば、「洗濯物を『よせる』」。
東京でイトコ会をした際、話題になりました。
「実家で、『洗濯物、よせといて』って言われませんでした?」

「言われた〜」
標準語だと『とりこむ』でも『よせる(寄せる?)』の方が、物干し竿の洗濯物をまとめて片方によせ、家の中によせ、部屋の一角にまとめてよせているシーンがマザマザと目に浮かびます。

実家で手作りの蒔蕪を「馳走してくれる際、母が

「きよろきよろしていて、取りにくいでしょうけど…」の『きよろきよろ』も語感がカワイイ！蒔蕪が目を丸くしてあちこち見ているようです。

私は夫と二人暮らし（十猫二匹）ですが、その状態を伊那の言葉で表すと『あんきに暮らしてる』『強調すると』『あんけらこんけら暮らしとる』となるのでしょうか。

こうしてみると、伊那は、擬態語が豊富なですね。

最近、私がふと思いついた言葉は『まやくせ』。良くないクセ、という意味だと思いません。締切ギリギリに仕事をしながら、

「そういうえば、夏休みの宿題も最終日にやったつけ…これって、私のまやくせ？」と苦笑いしました。

（株式会社キャラウィット代表取締役 締役）



いまの日本人に求められているもの

（戦後70年を迎えて原点回帰は可能か）

唐木 浄治

長野県の伊那小学校は、昭和43年度から53年度までの10年間、県教委と文部省の指定を受けて「情操教育」と「幼年教育」にかかわる実践研究を行ったことと通知表がないことでも有名であります。

この研究成果から得られた崇高な信州人気質の原点は、高遠藩の学問所として設立された「進徳館」（しんとくかん）にあると云われている信州人は多い。そのわけは、孟子・曾子・孔子・顔子・子思五人の聖人が進徳館内に祀っているからと云われています。この進徳館では、8才から25才までの藩士の子供が中心となり、午前八時頃に登校して読書をしたり講義を開いたりしていました。そして、午前十時になると高学年は武術に励み幼学年は筆学所で習字を習

い、午後は自由学習で復習や論議を行っていたようです。

とくに授業は、個別指導を主として1人ひとりの個性に合った指導がなされ、午後の論議では当番生が講義し、これに対して出席生徒が自由に質問・批判・意見を述べて熱心に議論をたたかわせていたことが伊那市の郷土史には書かれています。

ところで、戦後失われてしまった日本人を取りもどすためには、日本人特有の「感性」「知性」「理性」の3大特性を再認識されることだと思います。

感性とは、きらりとひらめく感性 創造豊かな感性
その感性を育くむ感性 知性とは、より感性豊かな知性 創造性豊かな知性

その知性を育くむ知性 理性とは、尊敬されうる理性 永遠なる崇高な理性

その理性を育くむ理性 このような三大特性を育むための期待される人間像、とりわけ個人のあるべき姿としては、自由人であること個性を伸ばして自己を大切にする

こと強い意志と尊敬の念をもつことなどが考えられます。

また家庭人としてのあるべき姿としては、家庭を愛の場といこいの場とすること家庭を教育の場とすること開かれた家庭にすることなどが考えられます。さらに社会人としてのあるべき姿としては、地域の善良な住民であること社会福祉に寄与することができるとが考えられます。

そこで提言したい。

- 感性豊かな夢と希望を育くむ学校と生徒
- いつも変わらぬ家族の絆と家庭の温もり
- 守りつづけよう学校と家庭と地域の連帯
- どこまでも伸びよう伸ばそう和のこころ
- 未来に向けて羽ばたけ次世代の子供たち
- 持ち続けよう日本民族の尊厳と義理人情
- 失わない日本人の誠実さと勤勉さと正義
- 失われた自然環境と伝統文化の再構築化

○アジア隣人諸国との対話と協調性の持続
○忘れない国際社会に向けた永久世界平和

このような信州人による原点回帰は、発想が柔軟で賢明な若者たちであればこそ、必ずや実現可能であるものと確信しております。

（NPO法人東京地域活性化推進機構 理事長・弁理士）



「おいでな伊那市へ」

北原 巖男

平成二十六年十二月十一日、杉並区は「全国初の自治体連携 南伊豆町に特別養護老人ホームの整備を合意！」との見出しで記者発表を行いました。平成二十九年度に、南伊

豆町内に杉並区民も利用できる特別養護老人ホームの開設を目指すとしています。

杉並区長は、「都市部の急速な高齢化は深刻な問題で、圏域外の特養整備は、この問題に一石を投じるものであり、また、都市部と地方の双方にプラスになる自治体間連携の先駆的モデルとしても大きな意義のある取組み」と語っています。急速な高齢化・取得用地不足・高い地価に苦しむ杉並区。杉並区の南西約200キロの南伊豆町は、家族の来訪・雇用者増等の経済効果、地域の活性化も期待出来ます。まさにウイン・ウインの関係です。

このニュースを聞いて、反射的にすぐ浮かんできたのは、伊那市の友好都市である新宿区のことでした。二つの区は、日本人の人口一つとつても、杉並区のおよそ53万6千人に対し、新宿区はおよそ29万2千人と大きく異なっています。しかし、いずれも急速な高齢化は同じであり、現在、新宿区内の特養が7か所であ

るのに対し、入所に関する協定を締結している区外の特養は23か所に及んでいます。そして新宿区が実施した三年前の平成二十三年度のアナリト調査でも、19・6%の方が、入所は「都外の施設でも構わない」と答えているのです。

伊那市は、東京から約200キロ、南伊豆町と同じです。名古屋からは約150キロと2大都市から近い有利な場所にあります。四季折々の自然やふるさと伊那の人たちのホスピタリティは入所する方々の安らぎです。

さらに重要なことは、伊那市の将来を担うふるさと高遠高校福祉コース等で学ぶ皆さんが、将来福祉や介護の職に就くための有力な受け皿づくりにもなるということです。

高齢化社会の中で若い皆さんが、自分を必要としている人々との心の交流を通じて、やりがいを見出し、「伊那に生きる」「ここに暮らし続ける」決意を身に着けて行くのではないのでしょうか。そんな

ふるさと伊那市の未来を担う若者達に心から力いっぱい声援を送りたいと思います。

「おいでな伊那市へ」

高遠高校は、そうした呼びかけの出来る人材も輩出しているかけがえのない学び舎なのです。

（元駐東ティモール日本大使・一般社団法人 日本東ティモール協会会長）

無重力体験

北原 照久



母のふるさとが高遠という縁で、ふるさと大使を仰せつかりましたが、テレビやラジオ、講演の仕事でなかなか行けません。そのような中でも「伊那から来ました」と横浜

の博物館にいらしたお客様から声をかけられたり、「高遠の出身です」といういろいろなか所で声をかけられたりして、大変うれしく光栄に思っています。

「七十歳までに宇宙旅行」が、夢のひとつです。そのトライアルとして昨年、無重力を体験しました。高度1万3千メートルまで上がり、約20秒間の無重力を数回体験できるのですが、体が宙に浮くという感覚はとても楽しいものでした。体験時は六十六歳。日本人で最高齢でした。



どんなことでもやってみたいと思ったことに、いくつになってもチャレンジできることは本当に幸せなことです。

事前の体力チェックもパスして当日を迎えられ、全く具合が悪くなることもなく楽しめました。健康であることは大切、本当に感謝だと思っています。

宇宙旅行に一步近づいたことを実感して、青く丸い美しい地球を自分の目で見られる日を楽しみにしているところです。

（株）トイズ代表取締役

「戸台の化石」保存会 ―入野谷紀行 6―

北村 健治

一九七〇年代ころから日本列島には静かな化石ブームが始まっていたが、南アルプスの化石産地として学術的に古い記録のある、また化石マニアに知られ始めていた戸台に

も、大きなザックを背負って化石採集を目的として戸台周辺に入山する家族連れなどがあった。

信濃毎日新聞は特集「南アルプス」(1986～1987)という特別取材の大型記事を連載し、本邦最高で長大な山並みを形造る地形地質、氷河時代からの特異な植物動物、これらの豊かな自然を舞台とする歴史・民俗・文化の全貌を紹介していた。その中に一九八七(S62)年五月五日「戸台の化石・保護の機運」が掲載された。伊那谷では一九八五(S60)年に伊那谷自然友の会が発足し、広大な天竜川流域を縦横に歩き、観察し、学ぶ、さまざまな野外体験学習が始まっていた。全国的にも村おこし町おこしの活動が盛んであったころでもあり、「戸台の化石」もなんとか地元の皆さんの理解と協力によって、化石の学習をしながら標本を地元保存する活動を始めたいと有志の皆さんと地元の関係者で検討を重ね、一九八六(S61)年十一月九日第一回学習

会現地採集会を企画実施した。そこにはいろいろな立場の皆さんが七十余名参集されて、主催者側からの「化石の地域外持ち出しをしない。参加者一人ひとりが化石を持ち帰るのでなく、地元になんとかまとめて保存したい」との呼びかけに対して、ことに小学生の皆さんから「賛成」の声を戴き、なんとかの組織の発足を協議提案し、翌年五月長谷村に「戸台の化石」保存会が発足した。以来五、六月には予備学習として先進地の自然史博物館や化石産地などを見学したり、後にはこの地域の岩石・鉱物を学ぶために「三峰川石ころウォッチング」を企画実施している。八月・十一月には「戸台の化石」産出地での化石採集を体験し、ラベルをつけ、簡単な標本整理や化石について学習して、「戸台の化石」資料室に預けて戴く。この活動が二十年・三十年と続き、学習会での採集化石も数千標本と膨大になり、長谷公民館に恒久的な保存施設も建設された。この保

存会活動は長谷村が新伊那市となつて、新たな公民館活動の一つとして継続されることになった。家族で参加された多くの化石愛好者や地元の子供たちの中には化石に魅せられて、自然史や自然科学分野への道を歩き始めた若者、専門的な研鑽を積まれた研究者も生まれつつある。これこそ保存会活動の最も狙いとするところであり、「戸台の化石」が入野谷の貴重な教育資源として地元地域や有志の皆さんにいつまでも見守られ続けることを願う。

「戸台の化石」資料室および保存会活動を含む、小黒川沿いの戸台層―アンモナイトとふしぎな礫岩―などが南アルプス(中央構造線エリア)ジオパークとして、二〇〇八(H20)年末日本ジオパークに認定され、二〇一三(H25)年再認定された。その間二〇一一(H23)年十一月には「戸台の化石」保存会は発足二五周年記念式を迎え、戸台の化石憲章が採択された。「戸台の化石」はトリゴニア発見以来百

十七年、アンモナイト発見以来五十二年が経過し、今秋には保存会が発足して三十年を迎える。

今年も六月には三峰川石ころウォッチングを、八・十一月には化石採集会を保存会が実施予定。また八月には南アルプスジオパークで、小学生を対象とする地震火山こどもサマースクールが企画されている。

(2016年15青梅にて、TK「戸台の化石」保存会会長



保存会のマスコットマーク
(1993年林博之氏入選作品)



伊那市に期待すること

木下 嘉隆

昨年五月に民間研究機関「日本創成会議」分科会が報告した二〇四〇年消滅可能性自治体リストに衝撃が走った方も多いと思います。伊那市は公表されたリストには載っておりませんでした。今のままでは人口が減少し続けている状態から容易に逃れることはできないと思います。日本の人口は二〇〇八年の1億2808万人をピークにその後は毎年減少しているのですが、その主な原因は若年女性の減少と地方から大都市圏への若者の流出(主に大学進学、就職時)にあると指摘されています。ヒト、モノ、カネが集中する東京圏には、日本が人口減少社会に入った現在でも若者を中心に人口流入し続けています。伊那の人口流出を止めるには、伊那が東京圏より魅力的である必要があります。そして伊那にひとりでも多くの人を呼び込むことが

一番大事だと思っています。

人生の価値観の変化から生活を豊かにエンジョイするゆとりあるライフスタイルを求める人が増えています。六十歳以上の方の人口は今後も増加していく、定年を機に田舎に移ろうという人も少なくありません。このような方をターゲットに何か伊那に移り住んで来てもらえるようなプログラムやサービスを長期的視野に立って積極的に提供してはどうかと思います。伊那には、豊かな大自然、恵まれた観光資源、穏やかで人間らしい生活ができる環境などがあるのですからきつと良いアイデアが生まれると思います。

長野県は男女ともに日本一長寿です。裏を返せば長野県の食生活、医療・介護サービス、地域の健康に関する活動がとても素晴らしいということとを証明していると言えるのです。これらの点をもっと強化、洗練し、隣接する大都市圏にアピールして、たくさんの人を呼び込むことができると思います。

お 蚕 様

河野 實

ボクが大阪から引き揚げてきたのは昭和十八年の春だった。戦況が思わしくなく、本土決戦が免れないと父が判断したのだった。父親は日本有数の軍需産業化していた住友金属工業に溶鉱炉技師として勤務していた。父の生まれは東春近村下殿島、母の生まれは宮田村新田だった。

父親の情報は住友金属の情報だったから確かなものだった。二十年三月には、大阪市此花区の住友金属グループの工業地帯は米軍の大空襲によって壊滅した。工場の隣接地に社宅があり、疎開してなければ一家は絶滅した。実際に疎開を躊躇っていた父の同僚家族の多くが、行方不明になった。戦後、母がNHKラジオの「尋ね人」に投書して、何度も一緒に暮らしていた父の同僚家族たちを探していたが、誰一人音信がなかった。住金の社宅は、戦前から水

洗トイレで都市ガスが使えた。日本最先端の文化生活を営んでいた。しかし、東春近の本家に疎開してからは、物置に住みトイレは外便所を使わせてもらい、風呂は一週間に一度の割合で、本家の仕舞い湯を利用させてもらっていた。

東春近の戦後の収入源は養蚕だった。戦前ほどでないにしろ、米作より養蚕の現金収入の方が多かった。本家も米作より養蚕に力を入れていた。桑を摘み背負いビクで上の原から本家まで運んだ。養蚕農家は蚕(かいこ)のことを、お蚕様と呼ぶほどカネになる虫として奉っていた。下殿島に洞(ほら)という地域がある。ここには今でも、お蚕様を祀る石碑が十数個も山の中に建っている。その石碑には、神虫玉大神と彫つてある。神と虫は一体文字である。蚕の天のところに神を置いている当て字であるが、カイコと読みコダマオオガミと読む。近年実家に帰るとこんなところを歩き、童心に還り妙に悦に入っ

ている。あつという間の生涯である。

(ノンフィクション作家)

神虫玉大神の石碑。ここで昭和20年代まで蚕玉祭りが行われていた



蚕玉祭りが盛大に行われていた下殿島洞地区。遠景は中央アルプス。



石を喰う犬

後藤 俊夫

一月九日(金)。新年早々に、拙作「マタギ」の上映会が伊那市生涯学習センターで開かれた。「まほら伊那市民大学生」約一五〇名の皆さんに見ていただいた。

映画に登場したマタギ犬は、(社)北海道犬保存会が推薦する日高地方の名犬だった。

犬は、巨大熊に猛然とかかる姿を披露して人々を魅了した。

一九九九年。伊那を舞台にした「こむぎいろの天使」すがれ追い」にも北海道犬が出演。この犬は、主人にすがれの巣やマツタケの在り処を教えるという特技を披露。観客を楽しませた。

いまから二十年前。私は東京から家族四人で古里の伊那へ転居。人里から離れた標高八〇〇メートルの山間に山荘を建てて暮らし始めた。

南アルプスの連山が一望で

きるこの地で、子ども達を育てたいという願いからだった。

間もなくのこと。三十頭ほどのサルの大群が家の周りを徘徊し始めた。その後、イノシシやカモシカが出現。ついに熊が二回出沒した。学校に通う子ども達の安全の為に、私は北海道犬を飼うことに決めた。名犬の血を受け継ぐマタギ犬だった。

家の回り三〇〇坪ほどを柵で囲い、放し飼いにした。年々増やして、現在三頭を飼育。この中の一頭が、石を喰うのが大好きな犬なのだ。名は千という。この犬は、庭の穴掘りが得意で、モグラ退治をよくやってくれているのが気がかりだった。

ある日のこと。千が突然動かなくなった。

早速、病院へかつぎ込んだ。レントゲン撮影の結果、腸に異物があるという。

手術の結果、直径四センチほどの石が出てきた。手術・入院代に十九万円がかかった。

一年前、再びこの犬が動かなくなった。やはり石を喰っていた。手術・入院代が十七

万円。二度あることは三度あるという。獣医さんの忠告もあって、こちらも庭の石拾いをして注意していたが、ついに三度目の石を喰った。手術の結果、恐ろしいほど尖った大きな石が出てきた。手術代は十五万円。あまりにも「金」のかかる犬である。〆て五十万円だ。家族会議の結果、家計を預かるカミさんがカリカリして言った。「犬舎を板張りにして、庭へ出さんようにし。運動はよく出して、散歩しらしッ！」

我が家のマタギ犬は、庭が大好きな犬である。尾をちぎればかりに振って早く庭へ出してくれとせがむ。可愛い顔と五十一万円が脳裏を交錯する。悩んだすえ、私は庭の石拾いをはじめた。

遠くからカミさんが見ていた。...

(映画監督)



共有地「沢山」と公海・宇宙

酒井 汀

子どものころ、おとなたちがよく「さーやま」の話をしていたことを覚えていいる。当時こどもには行けない世界のように思えたが、後に学校の行事として、その植林に行つたような記憶がある。

平成二十四年暮に発行された「手良誌」の九二ページ以下「沢山をめぐる六か村の入会権争い」という記録は面白い。

「沢山(さわやま)」は手良の奥山から藤沢に接する広大な山地で共有地になっている。そこには昔、燃料の薪や屋根を葺くかやなど、また「刈り敷き」という稲田の肥料として埋め込む若葉などの資源があり、最寄りの六か村(部落)の人たちが共同で利用していた。「入会(いりあい)権」は、そこに入って利用する権利のことであり。その利用権に関する紛争や訴訟の話である。

内容を紹介する余裕はないが、そこから現代の国際関係が重なるって見えてきた。

諸外国でも、集落から遠い奥山や密林、また氾濫が重なる河川の流域などは、最寄りの集落の共有地になっていることが多い。共有地に関する面白い寓話がある。「昔、各戸が若干頭ずつの羊を飼って衣料を自給自足していた集落で、ある人が共有地に羊を放牧するなどして自家用以上の織物を作り、売って金を儲けた。それを見た他の人々も共有地の草で羊を飼うようになり、みんなが競って羊を増やした結果、牧草が枯渇して羊は絶滅し、衣料の自給体制も、延いては集落そのものも破綻してしまった。」という喩え話で、経済学や社会心理学の「共有地の悲劇」というテーマになっている。

地球上の国々という集落にとつて、海は、誰でも漁をしたり海上交通に利用したり資源を採集したりできる共有地のようなものであった。日本は太平洋に最寄りで一番に活



(帝塚山学院大学非常勤講師)

用した国と言えよう。今、各方面からこの利権に参入しようとする軋轢が生じている。更に航空圏や宇宙という共有地でも縄張り争いが始まっている。公海での魚の乱獲や密林の乱開発など、およびその弊害もよく報じられる。

地球レベルに拡大し、国連という機構をもつ国際社会でも、基本的に「沢山の山論」に似た様相があるようにみえる。

「沢山」の資源価値がなくなつて人が入り会わなくなつた今、そこで増殖した野生動物が集落の田畑を荒らしていると聞く。今昔の感の中に人間の性をみる。

豊かな歌声 「合唱団まい」

笹本 正治

「合唱団まい」の演奏会のチケットをいただきましたので、二〇一五年一月十二日に松本市のハーモニーホールへ公演を聴きに行ってきました。この合唱団は一九九二年に伊那市で結成され、一九九六年に雨森文也氏が音楽監督として就任して以来、全日本合唱コンクール全国大会に十二回出場し、六回の金賞受賞をされた合唱団です。さすがにその経歴の通り、素晴らしい歌声でした。これだけの合唱団が伊那市を根拠に活躍しているのかと驚き、かつ喜んだ次第です。

プログラムは歌い継ぎたい日本の歌とドイツの名曲を味わうの二部構成からなっており、日本の作曲家がドイツの伝統を受けていることを実感しました。何よりも合唱を通じて人の声の素晴らしさ、日本語とドイツ語の美しさを堪能しました。

能しました。

合唱の響きに浸りながら、私たちは日本語の美しさを認識し、それをどれだけ大事にしているのだろうか、改めて不安に思いました。きれいなそして豊かな言葉に富んだ日本語に誇りを持ち、子供たち、そして孫たちに、品格のある日本語を伝えていきたいものです。

伊那市高遠は西洋音楽を日本に移植した伊沢修二の土地です。伊那市に合唱団まいが誕生した背景は知りませんが、きつと近代以降の様々な文化的な積み重ねがその背後にあったものと思います。自分たちは認識していなくとも、歴史的な伝統や文化の奥深さが私たちを支えてくれます。それに感謝し、認識したいですね。

合唱団まいが伊那市民の心にもっと潤いをもたらしてくれるだろうと期待しながら、今年最初に聴いた音楽会はとても感動的なものでした。

(信州大学副学長)

嬉しい庭づくり

白井 温紀

縁あって、今年の三月に、箕輪町で庭づくりをします。伊那市の学校時代からの友人が、新築するにあたり、数年前、声をかけてくれたのです。

その頃、私は、鎌倉市に住んでおり、遠隔地で心配しましたが、それまでも、北関東や、軽井沢などで造園工事を請け負っていましたので、楽しみにデザインさせて戴こうと思いい、お引き受けしました。

しかし、人生は思った通りにはいかないもので、私は、その後まもなく、北海道へ移住。友人の新築計画も、大幅に遅れました。とは言え、遅れたのも幸いで、道東の大樹町という、伊那市と似通った気候の寒冷地に住んで、造園上、留意すべきことを経験できました。北庭の寒さ、たまに降る湿った雪の重み、雨の後の凍結、等々——伊那市で生まれ育った私ですが、長く鎌倉に暮らして、忘れてしま

ったことは沢山ありました。庭をつくるには、地元を知ることが一番。気候、地形、土壌、在来の植物、つまり、土地の自然です。そして、石や木材など造園材料や、造園の工法、つまり、その土地の庭園文化を、じっくり観察することが肝要です。

庭づくりを仕事にするようになって、私は、伊那市とその周辺の、暮らしの景色というものに、とても心惹かれるようになりました。家や庭を寒風から守る生垣の美しさ。良く刈り込まれた仕立物の常緑樹。地元の石を使った落ち着いた造作……。先日、造園会社の親方が連れていってくれた手良の風景は、穏やかで、集落全体が絵のようにきれいでした。

それは、私が英国で学んだ西洋の庭とは、かけ離れたものですが、今を生きる私たちに必要な庭づくりは何か？と真剣に考え、視野を広く持つて、素直に土地に寄り添えば、自ずと、住まい手の暮らしに調和するデザインを見つける

ことができる、と思うのです。
伊那へ帰れば、懐かしい顔、
懐かしい風景に会えて、嬉し
いことばかり。有難い仕事を
させて戴き、とても幸せです。

(ガーデンデザイナー)

「伊那っていいな」

鈴木 福

昨年は伊那に住んでいた
ひいおばあちゃんが亡くなり
寂しくなりました。喪中だっ
たので、年末年始は伊那に行
かず、伊那リゾートでのスキ
ーがでず残念でした。でも、
伊那は大好きなので、今年も
行きたいです。

雪を被った山々は本当にき
れいですね。去年初めて釣り
をして釣りが大好きになった
ので、今度天竜川で釣りもし
てみたいな。

伊那のこと考えるとワクワク
します。

やっぱり伊那っていいな。

(こどもタレント)

原稿の枚数と暮らし の変化

中村 彰彦

平成六年(一九九四)に直
木賞を受賞した直後には、年
間に四百字詰め原稿用紙に
しておよそ二千四百枚分の小
説やエッセイ、ノンフィクシ
ョンの類を書いていた。

それから二十年、昨平成二
十六年には千五百枚弱しか書
けなかった。六十四歳とサラ
リーマンなら定年を超えた年
齢になったので、土日と祝日
には人並みからだを休める
ことにした結果である。

それと並行して、愛犬こな
つ(ヨークシャテリア、牝)

をつれて妻と散歩を楽しむよ
うになった。拙宅のある西東
京市の千駄山公園から東の方
角を眺めると、天気の良い日
にはスカイツリーが遠望でき
る。西南の彼方には、運よく
富士山が見えることもある。

また、この公園を北から南
へ越えて石神井川の岸辺に新
設された遊歩道から流れを見

下ろすと、いつの頃からか居
ついた鴨の群れがパンがほし
くて寄ってくる。白鷺、鶴鴒、
目白、鴨、椋鳥なども見掛
るが、感動的なのは水面近く
に青い色彩を一闪したように
飛ぶ翡翠を目撃したときだ。

最寄りの西武新宿線西武柳
沢駅よりひとつ新宿寄り、東
伏見駅近くの武蔵関公園には
翡翠の巣穴がいくつかあるの
で、われわれが会おうのを楽
しみにしている個体もこの公
園から魚を獲るためにやって
くるのだろう。

この石神井川では、昨年の
夏に縞蛇が泳いでいるのを見
た。私は昭和四十八年(一九
七三)から四十三年間西東京
市(元は保谷市)に住んでい
るが、蛇を見たのは初めての
経験だった。流れの中にいる
亀も、大形、中形、小形と三
匹見つけた。

しかし、これらの亀はなぜ
か甲羅干しをするため岸に這
い上がってこないし、今は厳
寒期だというのに冬眠せずに
いる。一体どうなっているの
か、などと埒もないことを考

えていると、休日があつとい
う間に過ぎていく。

(作家)



人と栖(すみか)、災 害の自然社会化

中村 三郎

地盤災害は、当然のこと乍
ら人と自然との接点において
発生する現象であります。被
災の場合は時に必然性あるいは
意外性が考えられますが、こ
の両面に関わる追跡は今日の
私達住民にとって大切な目標
でもあります。

二十年前の阪神淡路大震災、
その後の東日本大震災、ふる
里信濃路の南木曾土砂災害・
御嶽火山災害、広島市の土石
流災害など、悲惨な災害は、
私たちに貴重な教訓を与えて
くれました。加えて最近東

南海地震の予兆、気候の温暖
化に伴う異常豪雨など災害予
知のことが取沙汰され不
安になります。近年私達の身
辺における人工的な地形改変
や土地利用の変貌は著しく、
「自然社会の環境」に大きな
変化を与え、土地に対する自
然観・価値観などにも影響を
与えています。

鴨長明の「方丈記(二二一
二)」冒頭文中のことは「人と
栖(すみか)」の意は防災上
なじみ深い。最近の異常気象
・地震と大災害の報道を聞く
と「災害も自然社会」という
環境が醸成されつつあるとい
うことも考えられます。いわ
ば「人間の都合優先」の生活
展開の結果でしょうか。しか
し自然は人間の理解を超えた
現象をしばしば露呈し、これ
が予想外の自然災害をもたら
しています。いわば「計り知
れない自然の都合」の追跡不
足ということも考えられます。
後氷期・縄文晩期における
温暖期には山地・山麓に大小
規模の斜面地形・地塊が形成
されています。平地の少ない

わが国では、この種の地塊とその周縁が古来格好の生活場・農耕地として利用されています。近年温暖化に伴う時間雨量一〇〇〜一三〇mm等の異常豪雨の頻度も多く、脆弱な人工改変地は勿論のこと、古来安定している斜面環境にとっても大きな危機であります。日常、次のようなことなどを目安に「人と栖」にかかわる認識を少しでも高めることが出来れば幸いでもあります。

(1) 現在は長い地球・地盤の歴史の果ての一コマであるということ。

(2) 自然は人間の理解をはるかに超える複雑なシステムを持ち合わせているということ。

(3) 語らぬ石と土・流れる水、生活の中で少しでも自然の生吹をも感じ取る五感の力を高めること。

などであります。

(防衛大学名誉教授)



写真絵本『タイグエンのゾウ』がゾウの住む村の子どもたちの手元に届きました！

新村 洋子

私は二〇〇六年ポプラ社から『象と生きる』という写真絵本を出版しました。

この本が二〇一三年一月ベトナムハノイの大手児童書出版社キムドン社からベトナム語に翻訳され『タイグエンのゾウ』となって出版されました。

私たち「ヨックドンの森の会」では学校に日本のような図書室がなく本を読む機会の少ない地元ベトナム、ドン村の小学校の子どもたちに無償で本を届け、ゾウと森の保護の必要性を訴えようと考えました。

幸い多くの団体と個人からご支援を受けて本を一〇〇〇部買い取る事ができました。昨年三月にはゾウの住む村のYJUT小学校の全家庭

に一冊ずつの三七〇部を筆頭に大学四校、環境保護局、ダクラック省ゾウ保護センター、市立図書館、動物園、政府機関、病院等に寄贈することができました。残りは日本に少し残してあとはヨックドン国立公園に置き、来園した大学生や研究者その他必要などころに無料で配布したり、観光客に販売してゾウ保護の基金に使っていただくようにお願いしてお渡ししてきました。

アジアゾウの保護、ヨックドンの森の保全のため、日本とベトナムの環境保護の絆が強まることを期待しています。

本の購入を支援してくださったのは、国際ソロプチミスト伊那、神戸プラスワンネット、杉並いつもの会、ベトナム友好村友の会、婦人民主クラブ高円寺、県央福祉会の各団体と個人六十九人の方々です。

国内では伊那市立図書館にも寄贈できました。これを機会に今後伊那市の皆様にもご関心お寄せいただけると嬉しいです。

昨年九月には寄贈先のYJUT小学校の四年生と五年生の各教室を回って授業をさせていただきました。皆さん感想文を書いて待っていてくれました。

四年生のグエン・ハー・カイン・リンさんの感想文を紹介します。

『タイグエンのゾウ』という本を読んで

ゾウについてとても多くのことを知ることができ、私はこの本がとても好きになりました。

ゾウは実に大きく、希少な動物です。家ゾウさんたちは、実に身近でかわいいです。ゾウは木材の運搬、人の輸送、観光などで人を助けてくれます。

私はタイグエンに生まれてとても誇らしく思います。

みんなでゾウを守らなくてはならないと思います。

この『タイグエンのゾウ』の作者に感謝します。

(ベトナムのアジアゾウ保護ヨックドンの森の会代表・写真家)



「坂の上の雲」再び

西村与志木

スペシャルドラマ「坂の上の雲」はNHK総合テレビで二〇〇九年から一年まで三年にわたって放送されました。放送界のみならず映画も入っても日本映像史上最大のスケ

ールを誇る作品と言っても過言ではない番組でした。放送後もたくさん視聴者の方から再放送の希望が寄せられましたが、90分のドラマ十三回という長さはなかなか編成（番組の置き場所を決める）するのが難しく機会が訪れませんでした。十年の歳月をかけてこのドラマを制作した私としては、何とか視聴者の皆さんの声に応えたいと切望しつつも実現せず悶々としておりました。

しかし二〇一五年はラジオ放送が始まって九十年、すなわち放送開始九十周年ということのでついに再放送が決まりました。しかも90分のドラマを45分×2本に編集し直したかたちで、二〇一四年十月から二〇一五年三月まで全26回で放送することが決定したのです。いわゆる「45分バージョン」というドラマの長さは大河ドラマなどのサイズと同じですが、意外と集中して見やすい時間なのです。

放送は衛星放送のBSプレミアム、日曜の昼12時からです。

私がドラマに携わり始めた四十年前くらいには、90分サイズのドラマもたくさんありましたが、現在では生活のリズムが変わったというのか、見る人の忍耐力が落ちてきたというのか、そういった長時間ドラマはNHKでは非常に少なくなりました。一方、コマーシャルタイムの入る民放では、その時間が息抜きといつか、気分転換になるので90分を超える長時間ドラマでも編成がしやすいのです。この原稿を皆さんが読みになるころには「坂の上の雲」は最終回の放送が近くなっている頃かもしれません、最大のクライマックス「日本海海戦」がラストです。是非、ご覧下さい。

（NHKエンタープライズ プロデューサー）



賢い調和と逞しさ

野溝 友也

「トム！おはよう」。十歳のジヨシソキが部屋の外から呼ぶ。海外で「ともや」は略されて「トム」と呼ばれることが多い。眠たい目をこすりながら井戸水で顔を洗い、ダイニングに向かう。お母さんがジェスチャーで早く食べなさいと言っている。朝から唐辛子とチーズの煮物、エマダツイ。あまり知られていないがこの国の食事は世界一辛いと言われている。脳天をつく辛さだが滞在も一週間になるとさすがに慣れてきた。僕が旅先に「ブータン王国」を選んだのは、数年前にある女優さんに勧められたからだ。

当時ブータンの観光大使をしていた彼女は、ブータンでは冬にヒマラヤを越えてやってくる鶴のために電気を引くのをやめた村があると聞いたという。鶴が電線に脚を絡ませる可能性があるというのが理由だ。人間が自然を借りて生きる、そんなブータンを一度訪れてください。そういう彼女の眼差しは澄んでいた。

二月末。春から始まるはずだった番組が頓挫したことを知った。次の仕事まで一ヶ月空いてしまう。スタッフを探していたプロデューサーに電話をしようと受話器を持ったまま考える。「いつから休んでないんだ？」そのとき件の女優の話思い出した。エアチケットやガイド、ドライバーなどを手配し、ビザも取得した。一つこだわったのが滞在はホテルではなく一般の家族ゲルテンさんが受け入れてくれることが決まった。場所はポブジカバレー。

滞在から二週間が経った時、近所のペマがお寺を巡るトレッキングに誘ってくれた。森を抜けポブジカの谷が一望できる場所でペマが言う。「冬はオグロツルがやってきて、その声で目がさめるのだ」と。

その時、女優の話が頭をよぎる。目の前に広がる谷を見渡しても電線は全く見えない。



（テレビディレクター）

廊下二題 伊那小学校の木造校舎

原 克

あの頃、伊那小学校は木造で、廊下は、ひんやり黒光りしていた。

夏の夕暮れ、忘れ物を取りに、ひとり校舎に入ったことがある。ひっそりとした廊下は、長く、恐ろしかった。が、はだしの足の裏に、廊下の板がひんやりと、やさしく気持ちよかった。

あれから五十年。毎日、大学の研究室にかよっている。研究棟の廊下は、リノリウムであろうか、たんねんにワックス掛けされ、清潔そうに輝いている。まことに気持ちよい。

しかし、ふと思う。どちらの廊下が、ほんとうに美しいだろうか。

谷崎潤一郎「陰翳礼讃」(昭和八年)は、おもしろいことを書いている。西洋人は光をよしとするが、東洋人は翳(かげ)りを含めるといふのだ。

たとえば西洋では、食器などを、「ピカピカ光る様に研ぎ立てる」。しかし、「われわれ」は、「薄っぺらでピカピカする」のを嫌う。むしろ、「却って表面の光が消え」、「時代がつき」、「黒く焼けて来るのを喜ぶ」。なぜなら、「深みのある、沈んだ、重々しい」のが、好ましいからだ。

西洋風の表面仕上げには、「光を撥ね返すような趣がある」。他方、東洋風では、表面の肌目が、「ふつくと光線を中へ吸い取り」、表面は「薄濁りのした」ものになる。しかし、じつはそこに、「古い空気が一つに凝結」し、時間の「滓」が、「濁りの中に堆積している」のである。

研究室への廊下を歩きながら、思った。

伊那小時代、ぼくらは毎日、廊下の拭き掃除をやられた。雑巾をかたくしぼって、友だちと競争で、あちらからこちらまで、何度もなんども拭いた。

今わかった。あれは、よごれをぬぐい去る掃除などでは

なく、時代の光を、ふつくと吸い取らせ、時代の空気を、ぬりこんでゆく作業だったのではないか。

伊那小学校の木造校舎、あの薄暗く、恐かった廊下の黒光りの中にこそ、時代の滓が堆積していたのであろう。研究室につづく廊下に立ち、あの夏の暗い廊下を、美しいと思った。

(早稲田大学教授)



「りんご」に思う、あれこれ

松下 俱子

十一月半ばになると「りんご」が届きました。蜜がたくさん入っていてとってもおいしいです、ありがとう。」という電話やはがきが届きます。昨

秋は大きなりんごの絵手紙を下さった方がありました。

一九五四年から五年間。高遠町の町民として暮らし、藤沢にある国立信州高遠青少年自然の家(当時。現 国立信州高遠青少年自然の家)に勤務していた頃、元気でりんごの名産地で働いていますという挨拶の気持ちを込めて、友人、知人にりんご(ふじ)を送っていました、みんなが喜ぶので、退任して帰京してからもずっと毎年継続していました。高遠りんごは私の無事を知らせる便りなのです。

高遠で勤務していた頃、全国に二十八ある国立青少年教育施設は立地している地域の資源を活用した特色ある主催事業を企画することが強く求められていました。私どもは

高遠町の農家、お寺、お店などに協力いただいて、「町内の旅」といったような事業を企画しました。その中の一つの体験活動がりんご農家の作業体験でした。ご迷惑だったと思いますが、手入れの作業をさせていただきます。参加

した子どもたちはりんごを一層身近な大切な果物と感じるようになったのでした。

私が三歳で入園した幼稚園ではすべての園児が「おもしろ」を持っていました。文字が読めない幼児が自分の持ち物を見分けることができるための方法だったのでしよう。飛行機、人参などさまざまなしるしがありましたが、私のしるしはりんごでした。かばんやハンカチにりんごの刺繍があり、登園すると、りんごがついているかばん掛けや靴棚を使い、りんごのついたコップを使い、りんごのしるしがついた棚から道具を出し入れしていました。七十年以上前のことです。

りんごはずっと私のそばにいてくれるように思うのです。

(学校法人恵泉女学園学園長)



「ナチスの手口に学ぶ」とはいかなることか

丸山 敬一

かつて麻生元総理が「ナチスの手口に学んだらどうかね」と発言し物議をかもしたことがあった。後でいろいろ弁明していたが、それは言い訳で、所詮本音がぼろりと出たものだと思ふ。

ナチスの手口に学ぶとは一体どういうことであろうか。少し歴史を振り返ってみよう。第一次世界大戦後のドイツは「世界で最も民主的」といわれたワイマル憲法を持っていたが、一九三三年一月に政権を握ったヒトラーは三月にいわゆる「授権法」なる法律をむりやり制定せしめた。

この法律はわずか四ヶ条からなる大変に短いものであったが、三権分立を否定し、政府に立法権を認めるとする大変恐ろしい内容のものであった。しかも政府の制定する法律は憲法と異なるものであつ

てもかまわぬというものであったから、ワイマル憲法はどれ程民主的であっても、完全に骨抜きにされ、まったく有名無実化した。

安倍首相も日本国憲法九六条の改正条件はあまりに厳格で実現性に乏しいので、閣議決定で憲法解釈を変更し、集団的自衛権を認めて地球上いたる所でアメリカと共に軍事行動ができるようにしようとしている。これによって現行日本国憲法の平和主義は完全に骨抜きにされ有名無実化するのである。これがまさに「ナチスの手口」なのである。

安倍首相は麻生元首相の進言に従い、その道を着々と進んでいる。ヒトラーの道がドイツ破滅への道であったように、安倍首相の道が日本破滅への道でなければよいが。

(中京大学名誉教授・法学博士)



教育のかたち

三沢 節夫

教室のなかを荘重な漢文の調べが響きわたる。織田軍の大攻勢を受けた高遠城は、城主・仁科五郎信盛が壮絶なる最期を遂げ落城した。私たちは、郷土史の授業で、初めて読む漢文に違和感はなく、落城の悲壮感が教室のなかにただよった。算数の授業では、微分積分法という魔法があり、例えば円の面積は、円を限りなく小さい底辺の三角形に分割して、その和で計算できることを教えてくれた。あるときは、地球の一周(4万キロメートル)より6メートルだけ長い綱で地球を覆ったら、綱は地表から何メートルの高さになるか、とつさに質問され、0・9とまで云って、あとは答えに窮した。(本当は、約1メートルがよい) 限りなく大きい数にだまされるなどという教えであった。

小学校は伊那谷の段丘をつ

くる山のかもと、野底の分教場であった。教える師は旧制伊那中卒の中村宇源治先生である。夏の天気の良い日になると、先生はクラス全員を連れ立って、近くの天竜川や小川にでかけ、生徒たちは水しぶきを浴びて泳ぎやハヤ・ウグイの手掴みに励んだ。あるときは、急な裏山の坂を駆け登り、柔いコケのじゅうたんの上に座って、先生の読む「風の又三郎」に耳を傾けた。高い青空のなかに濃い松の緑がとけ込んで、心地よい風が林の中を通りすぎた。

時代は激しい太平洋戦争の真つただ中、巷では「打倒米英・鬼畜米英」が叫ばれ、「勝ちぬくボクラ少国民」の歌が歌われていた。中村先生は、「これは正義の戦争」とか「日本は必ず勝つ」という話は一切しなかった。私が戦争という黒い雲に押しつぶされないで、その後の人生を含めて、人間的に生きられたのは、先生から教えられた広い心、自由かつ達の精神のおかげである。旧制伊那中二年のとき敗

戦となり、そのあと、これからは自由に生きていけるという希望が少しずつ湧いてきた。戦争で死んだ兄の蔵書の中から「微分学・学び方・考え方と解き方(藤森著)」を拾い出し、この本にとりつかれたのは、小学生の時の先生の教えにつながっている。私は、その後、無限大・無限小が最も先鋭に現れる科学、即ち、多体問題(理論物理学)を研究する道へと進んだ。

いま、日本の教育は小学校から大学院まで、文科省の規制でがんじがらめである。その一方で、政府が教育に出す金は、GDPの3・5%、OECD先進29ヶ国のなかで最低である。構造改革とアベノミクスで非正規雇用者は二千万人を超え、企業は非正規職員にはきちんとした教育をしない。大学卒の若者は正社員の職がなく、奨学金が返還できず、その滞納額が九百億円を超えた。地方の国立大学は最低の運営予算まで削られて青息吐息である。若手の研究者たちは、任期制にしばら

れて短期間に成果を上げなければならぬので、ノーベル賞レベルの研究などとてもできないという。

教育に金を出さない国は減る。安倍首相と文科省の官僚らは、このことを忘れていたのではなからうか。

(日本大学名誉教授)



郷里の先人「中村弥六」

三澤 毅

維新政府は欧米の近代的法制、官制を取り入れるべく岩倉・大久保等の視察団を派遣し、その後の明治政府を築く有能な人材を育てた。林学なる学問、学術が日本に持ちこまれたのは岩倉視察団に参加していた松野碩（はざま）で

あった。彼は当初林政を学ぶためにドイツに派遣されたのではなくたが、彼の地でドイツの林政・林業技術に接し大いに興味を示しドイツの林業政策・管理システムをわが国に導入すべきことを大久保卿に進言した。自らもドイツ山林学校で学び帰国後内務省土地寮に勤務し山林に対し一定のシステムを導入した。これが日本林政の出発点であった。

やや遅れて林政に登場するのが高遠の人、中村弥六である。町人の出身ながら学問に秀で東京開成学校でドイツ語を学び、これをいかしてドイツに留学することになった。多少財を成す能力にも勝れていたとみえ、当初私費留学の予定であったが、途中、ドイツを訪れた大久保卿の知遇を得て官費留学となる幸運に恵まれた。ミュンヘン大学で森林学を学び学士位を取得した。帰朝後は東京山林学校（東京大学農学部の前身）で教鞭を取ったり内務省地理局に勤務する等していたが、明治二十

二年（一八八九）に憲法が制定され翌年衆議院選挙が行われることに伴い官を辞し、郷里から立候補し当選、以降明治四十一年まで当選十回に及んだ。

議員時代は現在でも森林の基本である森林法の制定に活躍したこと、土地の官民有区分等に地についた議論を展開しており、その知見学識については驚かされる。但し、やや野党的色彩があるのは伊那人の特性であろうか。

この大先人に及ぶべくもないが、小生も林学、林業技術の世界に入り、若き日に長野営林局にあつて、諏訪、上下伊那の国有林経営計画の編成や木曽王滝所在のひのき材の伐採搬出に従事した日を思い出している。

(日本林業技術会 顧問)



年頭所感―ハワイからみた今年の日本経済

三澤 満



日本経済は、アベノミックスで、株高、円安で様変わりとなった。デフレ脱却は可能となろうが、日銀の目指す消費者物価2%の達成はむずかしい。経済成長率も1%弱と多くは望めない。

アベノミックスに一方的に酔ってはいけぬ。株価は、年末終値が米国が\$17、823、日本が17、450円とほぼ同じ数字となっている。過去を振り返ると、日米株価が同じ数字となる時は、両経済が比較的好調の時であった。米経済は、順調に推移

しているが、日本経済は、株価が経済の実態より先行している。

円安による消費者物価の上昇は庶民を苦しめ、円安は大企業を潤すが、中小企業には逆風となっており、地方には、円安のメリットは届かないと言った諸問題も出てきている。海外から見ても、円安の最大の問題は、海外では、日本経済も日本企業も\$ベースでみるので、日本のGDP（国内総生産）も企業の規模や利益も、この円安で、全ての規模が三分の二となってしまうことだ。これで、日本のGDPは中国の半分となり、日本企業の財務数字も大幅に減少した。これでは、マクロ、ミクロ共に、じわじわと海外での日本の存在価値が下がって来ることと懸念される。

アベノミックスのもう一つの問題は、走りはじめたら、なかなかストップ出来ないことだ。国債は日銀がほぼ無制限に買い取ること、円での価格を保持している。しかし、この国債の暴落が海外では懸

念されている。海外の投資家は\$ベースで見ると、日本国債は、円安により\$ベースでは、すでに三分の二の価値に暴落している。これが円ベースの国債の価格に跳ね返ったら、金利が暴騰し、日本経済は大混乱となる。そうしたリスクを抱えての金融の超緩慢政策であることは十分承知しておく必要がある。

国際的には、ロシア経済が心配だ。資源国には、原油安は大きく響くが、1バレル50ドル台と一時の半値となっている。通貨ルーブル安も止まらない。外資を呼び込みルーブル安に歯止めをかけるため金利を大幅に上げ、目下17%の異常事態だ。今年のロシア経済は、世界経済混乱の引き金となるかもしれない。

こうしてみると、二〇一五年の経済は、日本も、世界も波乱含みの一年となりそうだ。
(ハワイ大学経営学部大学院教授)



溪谷が美しい クスコ・マチュ・ピチュの旅

宮原 照夫

メキシコ空港を飛び立った飛行機は、約六時間かかってペルーの飛行場にたどり着いた。降り立った街は意外に静かだった。

ホテルのチェックインをすませ、街をぶらついた。明日はクスコだ。夕食はチチャ酒であった。特に強い酒だった。リマからクスコまで一日一便しかないフライトだ。当日の朝は天候が余り良くなく、飛ぶかどうかパイロット達が話し合っていた。二時間ほど遅れて、ようやくクスコ行きが飛び立った。五千mの上空を飛行機は気持ちよく飛んだ。山と山の間を縫うように飛んでいた飛行機は一気に上昇し、五千mを超えたように思えた。そして徐々に下り始めた。いよいよクスコに降り立った。クスコは大きな都市ではなかったが、石造りがいたる所

に見受けられ一興の都市だった。クスコは標高三九五m、山に囲まれている盆地だった。インカ文明の不思議は、彼らが車輪を持たなかったことである。特にピューマの体になぞられて造られたクスコの町で、頭の部分に見立てられるサクサイワマンの砦は圧巻である。この砦の建設を実行した第九代パチャクティ、第十代トウバク・インカ・ユバンキの時代のクンカ王の権力が絶大であったことを物語るものである。当日はチチャ酒を軽くやり、翌日のために早めに休んだ。

クスコからマチュピチュ行きの列車



翌日は電車で朝七時にクスコを立ち、スイッチバックしながら山を登る。ワコンド川沿いのオリヤンタイタボを過

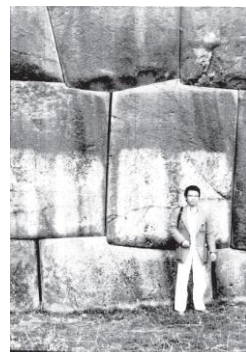
ぎると、今度はウルバンバ川沿いを走る。五千m級の山々に囲まれたインカの谷は、ほのぼのとして美しい。

クスコから川沿いに百kmほど下りると、山深い溪に入る。谷底から急坂を四百m登った山中に、空中都市マチュピチュは蒼然と姿を現す。朝露が晴れていく中、ベールをはがされ姿を現す遺跡。はるかに遠いインカの時代に思いをはせ、遺跡にたずむ。幻想的というしかない。

以前はマチュピチュの遺跡までのミニバスは、ブエンテリイナスの駅から出ていた。列車でやってきた観光客は、この駅から往復二〇ソールのチケットを買って遺跡まで向かう。

マチュピチュは、現在ペルー観光の目玉中の目玉であると言っている。インカの都市づくりの素晴らしさを、完璧に近い形で残している、奇跡的な遺跡である。

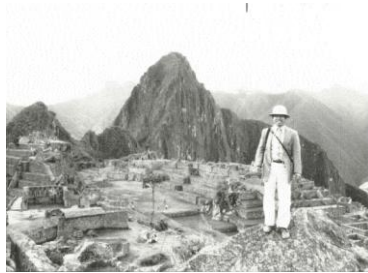
マチュピチュの墓地から発見された一七〇体ほどのミイラの九割が女性だった。男たちはゲリラ戦の最中に命を落とし、マチュピチュに帰ってくることは出来なかった。



サクサイワマンの砦の前

農地管理人住居跡、アンデネス(段々畑)、葬儀の石(有理聖台)、墓地、太陽の門、石切り場、主神殿、三つの窓の神殿、インティワタナ(太陽をつなぎとめる石)、居住区、石臼、コンドルの神殿、太陽の神殿、王女の宮殿、陵墓、水汲み場、インカの石、マチュピチュ山頂、月の神殿などがある。

マチュピチュの観光客にとって「グッバイボーイ」は欠かすことの出来ない存在だ。マチュピチュの遺跡のある山の上から、アウトバゴンの駅のあるアグアスカリエンテス



マチュピチュの遺路

行のバスが走り出すと同時に、乗客はグッバイボーイの姿を追い始める。

次の日は、来た道と同じようにリマに戻った。リマはかつて内乱あり、街の中心地が大変な目にあつた町だったが、今は静かな町のたたずまいになっていた。

(元週刊少年マガジン編集長)

「感動の伊那」

向山 僚一

天竜川の両側に二大山脈が走る伊那は、日本一の美景地であり、また、桜高遠の集客地を含んでおり、多くの画家も訪れます。

新宿伊勢丹での個展を四十回続けられた主因は、そこにあります。

四十年前の第一回の個展では作品すべて(八〇余点)求められ、ひそかに驚いたこともありました。

今回(二月四日～一〇日)の個展をもって、伊勢丹での個展は終了となります。

ありがとうございました。

(洋画家)



桜 高 遠



アトリエ写真



40年前の第一回個展

「まほら伊那の会」から 「ふるさと信州 伊那の会」へ

森田 芳夫

「モリちゃん、よろしく頼みますよ」と言う久保村昭衛氏(荒井区出身)の声はいつも叫び声に近く、大きかった。秋葉原にあった「伊那市ふるさと大使館」で三年前まで毎年開かれていた「まほら伊那の会」開催準備会の帰り際、その声を幾度となく背中で聞いたものである。

「まほら伊那の会」は首都圏に住む伊那市にゆかりのある人々が一堂に集い、親睦を深める目的で年に一回開かれる「ふるさと会」である。昨年は十一月十五日(土)、「アルカディア市ヶ谷」で開かれた。平成十年に始まったこの会も十七回目を迎えた。これほど長い間継続できたのは、久保村氏の統率に負うところが大きい。それを二代にわたる市長を始め、市側が組んだ体制がしっかり支えてきた。及ばずながら私も第一回から

世話人に名を連ねている。この会が発足したとき、これを手伝うことが即「ふるさと大使」としての存在証明の一つになると考えた。そして、その気持ちは今も変わらない。

残念ながらこの二年間、会場に久保村氏の姿はない。平成二十五年六月、氏は都内の病院で八十四歳の生涯を終えられた。その年の秋に開かれた十六回目の会では、出席者から「知らなかった、知らせてほしかった」と多くの嘆く声があった。

第一回開催の前年、平成九年、秋葉原で電器・電子関連機器を扱う会社を経営する氏は自社の一室を提供して「伊那市ふるさと大使館」を開いた。著作『私の仕事 私の信条』そして故郷『平成十九年刊』の中で大使館開設と「まほら伊那の会」への思いを語り、「東京に住んでも、私には素晴らしい伊那市が待っていると思うと心強い限りです」と述べている。

久保村氏は誰にも引けを取らない「愛郷の士」だった。

久保村氏亡き後、大使館は閉鎖されたが、この会については仕事仲間であつた唐澤喜美子さんが統率を引き受け、第一回から名司会ぶりを發揮している唐澤真理さんが「まとめ役」に当たる。市側の支援に加え、首都圏在住の西箕輪、伊那、手良、東・西春近、富県、美簗、高遠、長谷などの出身者が各地区の世話人代表として集まつて運営の一端を担う。

久保村氏亡きあと三回目の開催となる今年から、会の名称がより分かりやすい「ふるさと信州 伊那の会」となる。

参加者は年毎に増えてはいるが、以前からその予兆があつた若い人の参加の減少を果たして名称の変更だけで食い止められるだろうか。そのカギは伊那市民の皆さんが、首都圏に住む身近な人々にこの催しを伝えていただき、出席を促してくださることにあるように思える。

詳しくは市企画情報課へ問い合わせていただきたい。

(元) (株) 実業之日本社常務



井上井月と河井継之助という人物

山北 一司

昨年暮れに九カ月ぶりに第二の故郷・伊那市を訪ねた。現在は新潟市秋葉区に住んでおり、鉄道の街・新津駅から長岡、高崎経由で長野に入った。

高遠の「さくらの湯」にのんびり浸かり、高遠城址を抜けて信州高遠美術館で開催中の生誕一四〇年・没後七十年記念「池上秀畝展」を鑑賞。

伊那市の宝は、こうした優れた人を排出する素晴らしい環境があることだろうとつくづく感心した次第である。

今回は優れた人を排出する素晴らしい環境の謎に迫るわけではないが、井上井月について少し触れてみたい。

新潟に来て是非訪ねたかったところに長岡がある。最寄りの新津駅から長岡駅まで信越本線で48・1km、54分である。ここ長岡も多くの偉人を排出しているが、その一人が連合艦隊司令長官を務めた山本五十六である。山本五十六記念館を見学した後、目的地の河井継之助記念館に足を運んだ。

私の大好きな作家、司馬遼太郎の代表作『峠』の主人公がこの河井継之助である。幕末を生きた長岡藩の家老である。河井は一八二七(文政十

年生まれである。一方、井上井月は長岡藩出身と言われており、生まれは河井よりわずか五年前の一八三二(文政五)年とされる。

幕末までの四十数年の間に、同じ長岡藩に生を受けたとしたら、もしかしたら二人には

面識があつたのではなかろうか。井上が江戸へ出て、各地を漂泊、行脚しだしたのは、

一八三九(天保一〇)年、十八歳のころという説があるが、河井が江戸に遊学したのは二十五歳の一八五二(嘉永五)

年と三十二歳の一八五九(安政六年)の二回である。同じ時代に同郷の二人がまったく違う形で、私の前に現れたのはなぜだろうか。雪解けの季節になったら峠を越えてこの謎に迫ってみたいとい

う密かな楽しみがある。最後に二人の人物から、好きな言葉と俳句を記して筆を起きたい。

河井継之助…「法や制度は清廉で能力ある人がいて、始めてその成果が出るものだ。人を得ずして法だけあるのは、かえって危険である」

井上井月…「花見とは又なきさそひ使かな」

(芸術文化普及研究家・生涯学習コーディネーター)



